

関する一次資料のような詳細な情報と人物描写を提供している。まるで読者にさまざまな切り口から地域的文脈をみつける楽しみを敢えて委ねているようにもみえる。しかし、もし著者が地域研究的視点からもさらに踏み込んだ分析を示してくれていれば、本書はインドネシアの政治的安定のメカニズムに関する地域的文脈をも明らかにするものとなり、さらには政治学と地域研究の双方のアプローチを接合しうる画期的な分析枠組を提示するものになったであろう。

#### 引用文献

- Collier, P. 2010. *Wars, Guns, and Votes: Democracy in Dangerous Places*. New York: Harper Perennial.
- Snyder, J. 2000. *From Voting to Violence: Democratization and Nationalist Conflict*. New York: W.W. Norton.
- 森下明子. 2015. 『天然資源をめぐる政治と暴力—現代インドネシアの地方政治』地域研究叢書 29. 京都大学学術出版会.

水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編。  
『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年、390p.

谷口謙次\*

近年、アジア研究において歴史研究、特に経済史研究への関心は低下している。他方で、地域研究や人類学、あるいは現状分析への関心はますます高まっている。これはここ

30年余りのアジア諸地域の経済発展、それに伴う政治的・社会的変動が背景にあるのだろう。だが、実際に地域研究や現状分析などの書籍を手にとると、その多くで諸問題への歴史的・経済史的背景に多くの紙面が割かれている。つまり、アジア研究において歴史学や経済史に関する潜在的な需要は決して低下していない。むしろ高まっているのではないかと筆者は感じている。

そうした中、新たに水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史研究入門』が出版された。これまでアジア史に関する研究入門としては、島田虔次ほか編『アジア歴史研究入門』と桃木至朗編『海域アジア史研究入門』がある。『アジア歴史研究入門』は総索引・総目次を含む全6巻と大作であり、現在も有用な情報を数多く含んでいる。しかし、出版からすでに30年が経ち、新たな研究や資料が多数出されている。『海域アジア史研究入門』はコンセプトが本書と非常に近いが、時期が9世紀から19世紀初頭と限定されており、分野も経済史のみならず、文化史、宗教史、外交史と幅広い。対象領域も東アジア・東南アジアが中心で南アジア・西アジアはほとんど触れられていない。アジア全体をカバーし、古代から現代までと幅広い時代について論じられている本書は、アジア経済史を学ぼうと格好の良書である。

まず、本書の構成をみることにしよう。本書は「序章」から始まり、「第I部 東アジア」、「第II部 南アジア」、「第III部 東南アジア」、「第IV部 西アジア・中央アジア」の4部からなる。第I部は中国について論じ、

\* 大阪市立大学大学院経済学研究科

第1章、第2章が前近代、第3章、第4章が近現代となっている。第5章は朝鮮について古代から現代までを解説している。第II部はインドを中心に論じ、第6章、第7章が前近代、第8章、第9章が近現代となっている。第III部は第10章が前近代、第11章、第12章が近現代となっている。第IV部は西アジアを中心に論じ、第13章、第14章が古代、第15章が前近代、第16章が近現代となっている。第17章は中央アジアの近現代について解説している。

各章は大きく3つのテーマ、生産（農業・工業）、流通（商業・貿易・市場・貨幣・金融）、国家（財政、税制、政策）について概観している。ただ、第I部と第II部は大半が中国とインドの1国のみを扱っているため、テーマごとに論じやすいが、第III部と第IV部は複数の国や地域を扱っているため、章の中にはテーマすべてを触れていないところも存在している（第5章も同様である）。

末尾には、文献一覧と付録がついている。文献一覧は章別で、日本語のものと英語のものが分けて掲載されており、非常に詳細で読者にとって利用価値が高いものである。付録は研究支援情報と共通項目索引に分かれている。研究支援情報は地域ごとに1) 先行研究を調べるには、2) 原資料を発掘・収集するには、3) 工具類、の3項目に分かれ、専門HPやアーカイブ・データベース、国内外の研究雑誌や図書館・研究所、事典や地図などのデータが詳細に記載されており、初学者だけでなく研究者にとっても極めて有用である。共通項目索引は重要な用語に関して地域

横断的に調べることが可能で、読者の関心を広げるのに役立つ。

次に、本書の特徴を挙げることにしよう。第一に、序章でグローバル・ヒストリーの重要性が示されたことである。グローバル・ヒストリーは「比較と関係」を重視するが、もちろん従来の研究でもこうした視点は存在した。しかし、その多くは産業革命期の西欧（特にイギリス）を基準とする類型論もしくは発展段階論であり、アジアの「後進性」が前提とされてきた。また、一国史観が前提とされて多国間にまたがる貿易や商人活動、移民などは重視されてこなかった。

グローバル・ヒストリーは歴史統計の整備や生活水準に関する指標の研究によって国際比較を可能とし、欧米とアジア、あるいはアジア同士を同じ基準によって比較検討するようになった。その結果、アジアは後進的な地域とは看做されなくなってきた。また、地域論やネットワーク理論、環境学などを援用してそれまでの一国史観を脱して、広域地域の特徴や有機的連関を描き出した。アジアは多様な環境や文化によって経済発展が多経路にわたり、複数の地域経済圏が重なり合っていた。経済圏は貿易や企業活動、労働力移動によって相互に結びつき、発展していたことが明らかになってきた。グローバル・ヒストリーはとりわけアジア経済史に多数の論点を提供し、研究の発展を促したといえる。

第二に、ほとんどの地域で現代史が大きく取り上げられたことである。従来、歴史学者は直近30年～40年の現代史を取り扱おうとしなかった。新資料の発表・発見の可能性が

高いこと、当時の政策や事件、関係者などの評価が依然定まっていないことなどが理由として挙げられていた。『アジア歴史研究入門』においても中国・朝鮮で現代について触れているが、政治史が中心である点、マルクス史観の影響で経済発展に批判的である点などいくつかの課題が存在した。しかし、アジアにおける近年の経済発展は経済史に大きな論点を提供している。つまり、現在の経済発展に至る歴史的経緯や社会経済的背景を考察することである。だが、現在の社会経済の状況が明らかでなければ、こうした論点は明確にならないであろう。この点で現代史は重要な意味をもつようになった。現代史研究は限られているため、本書では現状分析の研究が数多く取り上げられているが、同様に本書が示した東アジアや東南アジアにおける 20 世紀前半の研究では、当時の研究や報告書が現在の歴史研究で重要な役割を果たしてきた。現状分析の研究も今後同様の役割を果たすことになるだろう。

最後に、議論の余地がある点を指摘しよう。第一に、モンゴル帝国を扱う章がなかった点である。第 1 章では中国に関係する点のみ扱われているが、他の章ではほとんど言及されていない。しかし、ユーラシア全体を支配した帝国では地域を越えた経済問題が指摘されている。たとえば、愛宕松男は元朝の銀不足について、当時同様に銀不足であったイル＝ハン国へ銀が流出したためと論じた。だが、杉山正明は逆に、イル＝ハン国から元朝に銀が流出したのであり、元の銀需要の高まりがイル＝ハン国の銀不足を招いたとし

た。この問題は単にモンゴル帝国だけでなく、16 世紀以降の「銀の時代」の要因と関係しており、触れられるべき論点だと考える [愛宕 1973a, 1973b; 杉山・北川 1997: 169-173]。

第二に、地域横断的論点の取り扱いについてである。一点目は、ポメラントの「大分岐」論である。イングランドと中国の詳細な比較研究であり、第 1 章でアジア諸地域において近世・近代の経済発展論に新たな論点を提示したと指摘され、南アジアの近世を扱う第 7 章、西アジアの近世を論じた第 15 章第 3 節でリプライとなる研究が示されている (p. 4, p. 111, pp. 220-221)。だが、中国明清期を取り扱う第 2 章では全く触れられていない。近代を扱う第 3 章では触れられているが (p. 53)、やはり第 2 章でもポメラントの議論を位置付け、問題点を指摘することが他地域の議論の位置付けにもつながると筆者は考える。

二点目は、家島の「イスラム海上交易ネットワーク」論である。10 世紀以降の海上交易ネットワークの変化は西アジアを越えて、中央ユーラシア・北アフリカ・南アジアに大きな影響を与えたと、第 6 章では指摘されている (p. 102)。しかし、第 15 章では研究が紹介されるに止まっている (p. 213)。ポメラントの議論と同様、西アジアにおいて海上ネットワークが果たした役割を明確に論じることは他地域での評価も明確にするものであり、必要であろう。

第三に、周辺・辺境の取り上げ方である。経済史は経済発展の歴史を重視するため、先

進地域を重視し、辺境地域を軽視する嫌いがある。だが、ネパールやチベットなどの山間部やスリランカや香港などの島嶼部は中継貿易の要所であり、かつ貴重な特産品生産地であった。そのうえ、大国を結びつける地域としての役割も果たしてきた。こうした辺境地域の役割を示すことも重要であろう。また、第Ⅰ部と第Ⅱ部では中国・インドの研究が主に取り上げられていたが、実際にはパキスタン・バングラデシュ・台湾など旧植民地や第二次世界大戦後の分裂によって生まれた複数の国家や地域を含んでいる。これらは近年、中国（中華人民共和国）やインドと異なる経済発展や社会構造の特徴を示している。前述のように現代史の重要性が増している中、これらの国家・地域をどのように描くのかも重要な課題であろう。

いくつか議論の余地がある点を指摘したが、本書はアジア史やアジア経済史を志す初学者だけでなく、アジア研究に携わる方々にも有用であろう。それは単に関連する研究や資料だけに止まらず、これまで関心を払わなかった地域や時代、研究課題を見出しうることである。アジア地域に関心をもたれる方々にはぜひ手に取られることを薦める一冊である。

#### 引用文献

- 愛宕松男. 1973a. 「幹脱銭とその背景（上）—13世紀モンゴル=元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(1): 1-27.  
 ————. 1973b. 「幹脱銭とその背景（下）—13世紀モンゴル=元朝における銀の動向」『東洋史研究』32(2): 163-201.  
 杉山正明・北川誠一. 1997. 『大モンゴルの時代（世界の歴史9）』中央公論社.

石井米雄著. 飯島明子解説. 『もうひとつの「王様と私」』めこん, 2015年, 224p.

櫻田智恵\*

#### はじめに

本書が発行された5ヵ月後の2015年の6月、演劇界最高ともいわれるトニー賞のミュージカル部門リバイバル作品賞に『王様と私』が輝いた。受賞はならなかったものの、渡辺謙がミュージカル主演男優部門に日本人で初めてノミネートされたことから、日本のメディアでも積極的に取り上げられ、これをきっかけに『王様と私』は、日本でも再び注目を集めることとなった。

この作品は19世紀のシャム（現タイ王国）を舞台にした「王様」とイギリス人女性家庭教師の「私」との交流を描く「歴史を背景としたロマンス」であり、実は当時のシャムについての誤解や誇張に満ちている、と本書は指摘する。本書の目的は、そうした「小説やミュージカルによって誤解の広まったシャムの『王様』の実像に迫り、この『王様』の思想に決定的な影響を与えた『もうひとりの私』と『王様』との長い交友のあとをたどり、それが、どのようにして『王様』の世界観に革命的变化をもたらしたかをたずねる」という3点にある（p. 10）。

2部構成で、前半が石井米雄による「もうひとつの『王様と私』」、後半が飯島明子による「解説 王様の国の内と外—19世紀中葉のシャムをめぐる『世界』」である。2010年

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科